

槐

かい

岡井省二創刊

平成22年9月号

平成二十二年九月一日発行 第二十卷第九号 通巻第三三一号(毎月一回一日発行)
平成二十二年九月十八日第三種郵便物認可



夏潮

高橋将夫

風鈴の軽き音色の乾物屋
中央に光集まる朴の花
汗を拭き拭き達者だと笑ひをる
散水と打水ほどの違ひなり

白日傘黒の日傘と並び行く
端居して孫が大きく見えにけり
新緑や子孫残してなほも生く
仏門と俗世を行き来する百足
炎帝の入つてこれぬ鍾乳洞
天網にかかるとなし夏鯨
夏潮の流れに意志のあるごとし

槐安集

水野恒彦

箱庭にゐるは 古人いにしえびとの 吾
健次忌の現身うつそみ濡れて泳ぐなり
水中花夢に入りたるごとく立つ
兆京てうけいは 限りなき 数星月夜
安心あんじんをもつて 冬瓜を跨ぐなり

延広禎一

円相を一気に 画き更衣
体内に水音ありけり 川床涼み
滝しぶき爆ぜて 不動智明らけく
高千穂を仰ぐ種牛夏け 天炎てんゆ
マラカスを振る 道化師や風薫る

加藤みき

目に沿うて 畳抜きをり 半夏生
一面の 青野の 先の 石鳥居
木天蓼を 伝うて ぬたる 青き雨
緑蔭や 泣く子 笑ふ子 眠る子よ
かみの毛の そよいで ぬたる 昼寝の子

石脇みはる

亡き姑ははの 陶枕に 風通しけり
喪籠ももりの日となり ぬたり 沙羅の花
七月の朝の かほりの 濃くなりぬ
青蜥蜴 鎌首も たげ 向ひ来し
師の 句碑と 杜若あり 川の音



中島陽華

炎帝や香箱捧ぐ僧連れて
夏の空も色蹴出しうつくしく
丑満の蘭鑄の息聞こえけり
涼風や熱き茶粥の冥加とも
雲雨あがりて一面のうつぼ草

栗栖恵通子

指の股洗ふてをりぬ螢かな
仰向けの蝦蛄の手足のむず痒き
祭りあと一錢焼きを圧してをる
八佛の囲む大日夏あけぼの
すこしづつ夫衰へるほたる籠

竹内悦子

新茶の香肌工に阿弥陀如来かな
真夜中の梵天分かつ祭かな
西の畑青鬼灯の身ごもれる
ゆで玉子つると梅雨のはじまりぬ
雨よけて檮の花の真下かな

大島翠木

鳥獸戯画そして大山蓮華かな
螢袋祈るに灯す次の間に
水馬そろりと掻きぬ和讃かな
転生も恋あるがまま業平忌
紫陽花の鬱三猿にたゆたひぬ

雨村敏子

卷尺の渦するすると明易し
朱雀門より大極殿まで朱夏
しやぼん玉の中の大空やはらかし
白昼の夾竹桃はさびしかる
青竹の節のあはひや夏霞

小形さとる

御祭風卵黄揺れてをりにけり
尽十方吹き通しなり藍浴衣
黒百合の孤り滾りの刻なりし
誰彼にほどよく無沙汰豆の花
同病と知りし杏仁豆腐かな

本多俊子

神鏡に近づいてゆく初螢
真青なる海の声なり沖繩忌
父の忌の言靈照らす螢かな
三伏や砂流れゆく砂の上
うつしみの色さしきたり羽化の蟬

久津見風牛

先客の白靴一つおかれをり
おんおんと逃水遠のくばかりなり
長茄子の雨の光りを吸ふてをり
南京の蔓の砥石にせまりたる
誰にでも抱かれて亀の鳴けるかな

近藤 きくえ

潮風の意のままとなり蛇の衣
空輪にふるるばかりに夏の蝶
青葉闇水の碎ける音のあり
滴りの命はぐくみをりしかな
供華は百合今日のこと今日すませけり

近藤 喜子

わたくしに遠き沖あり草矢射る
少年となりけり蟬の森ふかく
竹林の中に金魚の遊びをり
こころにも日向のありぬ川蜻蛉
手の平の螢かすかに媚葉の香

谷村 幸子

すかんぼやもぬけとなりしナフタリン
三笠山は親しき形や夏の鹿
花擬宝珠地蔵に供え空仰ぐ
目の前の沙羅が散りけり涅槃像
蓮咲いて池面が高く見えにけり

瀬川 公馨

砒素色を含みてゐたる蓮の花
もしや守宮のモールス信号では
今年竹晦祝サッカー杯の空のふくらみぬ
アフリカンキッズに冬の日差しかな
梅雨鯨の一泡吹いてゐたりけり

久保東海司

呑み干して声となりけり岩清水
蕉翁の句碑はその奥道をしへ
金婚の父母に草笛吹き祝ふ
自牡丹四方より闇の来て包む
虹の橋渡りたき子の瞳かな

松原仲子

白百合や言葉少なに空を見て
少年の踏み出す一步風涼し
夏の日やうす目して利く白ワイン
炎帝の中に裸婦像凜として
群星のゆりかごに蟬生まれけり



槐市集

寺田すず江

なまこ壁威厳保ちつ夕焼けり
扁額の文字のかすれし花南瓜
歓声の一際高し紙魚走る
山々に雲噴きあぐる袋角
先人の夢を追ひみる蛸かな

富松寛子

揺るぎなく生きて来たりし松の芯
堂塔を掲ぐ牡丹の力かな
若葉して向かふが見えずなつてをり
気持よきパンチ浴びをり石鹼玉
花菖蒲風に清濁ありにけり

中 貞子

心太床几に年期ありにける
植糸終へし田の畦まはる媪かな
雄花持ちかぼちやの精となりぬたる
白南風や本堂沸きし寄席囃子
かはたれの十葉の花明かりかな

中 島 昌 子

琴の糸紡ぐ里なり鴛鴦涼し
十葉に囲まれてゐる一軒家
ひとり居の一日なりけり心太
草引くやうしるに母のをるやうな
どの席もガーベラ揺るるレストラン



槐集

高橋将夫選

あめんぼう水底を知る由もなし 枚方 谷岡 尚美

マイウエイの歌聞こえるくる蝸牛
粽解くくるくる記憶甦る

古陶館春満月のやうな皿
みづからの香にふるへつつ女王花

飛魚の海を離るる雫かな 守口 岩下 芳子

大茅の輪くぐる内外に潮の香
ぐいと引く新玉葱の紫紺かな

墓出でて大將軍の面構へ
天地をゆつくり急げかたつむり

白線の上を真直ぐに夏来る 枚方 富松 寛子

熊楠の熊野はやさし花檣
首あげし鶉の乾坤を確かむる

吹くよりも追ふが愉しき石鹼玉
少年を夢中にしたる野蒜掘

いつまでもデニム気分の更衣 枚方 中野 京子

はなみづきうつぎがまずみ白い風
老いてなほ高く手を振る白緋

螢火の乱舞なりける地の罅
不老不死開ききつたる水中花

前世でお会ひしたかも蟬生まる 安城 近藤 公子

でむしや自我引きずりて高野へと
ひまはりやわが身に潜む火種あり

自地着れば会へる予感のしてきたる
イントロは始まつてをり桃の夜

明易の覚めぎはの聲残りたる 枚方 近藤 紀子

道をしへ知己に会ひたる心地する
初鯉萬歳衆とふ大吟醸

ひとところ水の濁りし代田かな
利休梅こぼれ地上の星となる

銀河往来 高橋将夫

◇「槐集」観照

みづからの香にふるへつつ女王花 谷岡 尚美

月光に咲く月下美人が自らの香に震えているように見えたとい
う。自らの香に自己陶醉しての振えではなからう。自らの権威
が放つオーラ、権威の力と恐さを自覚しての震えだと思ふ。老
いても尚、美しく在らねばならない宿命に対する武者震いな
かもしれない。〈マイウエイの歌聞こえくる蝸牛 尚美〉〈古陶
館春満月のやうな皿 尚美〉など、余裕を感じさせる句にも好
感を持てた。

飛魚の海を離るる雫かな 岩下 芳子
飛魚が海面を飛んだ景。飛んだ瞬間に飛魚から滴った雫に焦点
を絞ったところが素晴らしい。局所を詠まれて、かえって広大
な海が目に見えなくなる。「海を離るる雫」の表現も美しい。〈大
茅の輪ぐる内外に潮の香 芳子〉もまた、部分を詠んで広い
空間を感じさせることに成功した一句。

吹くよりも追ふが愉しき石鹼玉 富松 寛子
石鹼玉は吹いて楽しむもんだとばかり思っていた。「追ふが愉
しき」と言われて、なるほど吹いている子より、はしゃいで追っ
かけている子の方が楽しそうだ。そういえば、石鹼玉を追っか
けていた頃の孫が一番かわいかった：もうそんな時期は過ぎて
しまったが。ところで、「孫の句はだめ」と一般に言われるが、
子育てを通り越して、子でなく、孫だからこそ見えてくること
も有るように思う。

はなみづきうつぎがまずみ白い風 中野 京子
花水木も卯木もガズミも白い花が咲く。なるほど、それらが
咲いたところへ風が吹いたら、まさに白い風。花が好きな作者
ならではの句といえよう。

ひまわりやわが身に潜む火種あり 近藤 公子
真夏の太陽を浴びて咲く向日葵を見て、身に潜む火種のような
ものを意識したという。ゴッホもまた何かを内に秘めて向日葵
を画いたのであろう。

道をしへ知己に会ひたる心地する 近藤 紀子
斑猫に逢つて知己に会つたような親しみ感じたという。めった
に逢わない虫だが、「道をしへ」というからには、私の事も良
く知ってくれているのだろう：そんな気にならなくもない。ち
なみに、「士は己を知る者の為に死す」。

夢殿に蛇の衣あり救世観音 西村 純太
この蛇は誠にいい場所です。夢殿のあたりで衣を脱いで、今頃は本尊の救世観音の慈愛を一身に受けているこ
とだろう。

パンドラの箱に残りし蠹 柳川 晋
パンドラの箱を開けたため不幸が飛び出し、急いで蓋をしたた
め希望だけが残ったという。異説も有るというが、本当に残っ
たのは蠹だったのかもしれない。この蠹は、はたして何のメタ
ファーなのだろうか。(以下略)